

# 幸田文、前期作品の言語景観・続

工藤力男

## 続稿のはじめに

前稿「幸田文、前期作品の言語景観」（本誌三十八号2022）執筆の契機については、その「序説」に簡単に書いたように、教室での「国語学演習」に発しているのだが、続稿を書くにあたって、いまだ少し詳しい事情を書いておきたい。

その年の講義題目は「幸田文と中島敦の言語世界」となっている。それは、前期に幸田文の「こんなこと」を、後期中島敦の「李陵」を読むつもりで準備していたのであった。新学期の教室で講義題目の趣旨を話したとき、わたしは両者の文体を、「割烹着と袴」と譬喩した。教室での作業や討議で、その対照的な文体を味わおうという魂胆であった。だが、

教室では、幸田文の文章に手間取って、中島敦には手が回らずに終わってしまった。

幸田文の著作活動のうち、最初の作品から昭和廿七年までを「前期」とし、その時期の作品に見られる語彙の特徴に着目してまとめて「前稿」とした。この続稿では、文法と語彙と表記について考察し、その言語景観全体の特徴を明らかにしたい。

本稿では、言及項目を絞るかわりに、必要に応じて用例を多めに挙げる。その用例には、適宜に、項目ごとに丸囲みの通し番号をつけ、言及箇所を太字で明示する。所在箇所の表示方法は前稿と同じく、括弧内に、巻・ページ・行序を示す。その行序は、作品名・章題・節題などを含まない、純粹の本文に限ること、前稿と同じである。底本は岩波書店版全集第

二刷(2001-02)である。なお、幸田文本人をさすときは太字で著者と表記する。

## 文法をめぐる

### 活用語の中止法

その作品を読み進んでただちに目につくのは、動詞「る」の中止形の多用である。それは、本稿の出発点になった、成城大学での演習の受講者もまず発した感想であった。

初めに動詞「ある」の実例を掲げる。

- ①戦争の疲労と倦怠になげやりになつてゐたとは云へ、  
それでもみんなそれぐゝの親を子を兄弟を砲弾の下に  
送つてゐ、(145)
- ②地上満目の焦土は、いまだに宿火をいだいてゐるかに、  
ちろ／＼と火のない焰を燃やしてゐ、(154)
- ③天上おほざらいつばいには、くるめく太陽が酷熱を以  
てのしか、つてゐ、人々は黄色くしなびて頸を垂れ、  
(154)

右は、著者の処女作とされる「父(菅野の記)」の冒頭部、  
底本第一巻の見開きの二ページに見える。②と③は、じつは

ひとつづきの文、即ち一文中にあるものである。

これは、著者自身が「作文」と謙遜した、言わば処女作ゆ  
えの不慣れによると解する人があるかも知れない。だが、著  
述活動を重ねたのちにも類例が多く見られるので、これは表  
現効果を狙っているのかも知れない。次の④⑤などは、その  
解釈を許すように思う。

- ④が、私は押へられず躍り狂つた。父は知つてゐ、あは  
れんでゐ、こらへてゐ、憂へてゐた。(159-12)
- ⑤古い友情をめくりかへして見、中絶えてゐた時間を考  
へてみ、かりに今また交際を復活すると考へてみ、さ  
らに今後の行きかひを予想してみ、角度をかへて前後  
左右へ思慮を配つてみした。(四24-14 ~ 25-1)
- ④は、婚家を出てきた著者と父との葛藤を語る「こんなこ  
と」の一節で、父の心中を推察する叙述が中止法を重ねて綴  
られている。⑤は、漢字「見」と仮名「み」の意図的な使い  
分けをうかがわせるが、一拍の動詞の連用形中止法を五つも  
重ねる、徹底した書きぶりである。
- 「ある」の連用形中止法は著者の好んだ表現らしく、第一  
巻には四十ほどの用例が拾える。助詞「て」の下接した中止  
法もあって、自分を撮影した数葉の写真について述べた短章

「れんず」に見える。

- ⑥一ツは母にいくぶん似てゐて、ひとはそれを優とした。一ツは父に似てゐて、父のもつ孤独感のやうなものが、うつすら現はれてゐ、ある種の人はそれを最上とした。

(1401-14)

ここは、助詞「て」下接形を並べて、対比を強調する意図をこめたのかもしれない。三つめが「て」なしの「る」中止形であることの意味は究めていない。

否定の中止法の「あず」も七例を拾ったが、動詞「をる」による「をらず」は遂に見いだせなかった。

動詞「ある」の連用形中止法は、肯定の「あ、」も、否定の「あず、」も、叙述を受け止めるには短すぎて不安定の感がぬぐえず、わたしは用いることがない。国語学演習の受講者の感想も、「おちつかない」であった。

かかる感想は他の一拍動詞に対してもいだかれるものである。その例を二つ。

- ⑦一語は一語にましてきびしくなつて来、しどろにする返事は更にことごとく気に入らるべくもなかつた。

(1257-14)

- ⑧罍からは腐敗した酒の香があがつて来、バスの最後部

は揺れがひどかつた。(1353-3)

連用形中止法は、形容詞型活用語にも見られる。

- ⑨気もちはさつぱりとかたづくわけには行かなく、(1614)

- ⑩人の顔にしてもどの顔も、まあこんなに綺麗だつたのと、しげく見とれてゐたく、(145-6)

⑨⑩に対するわたしの違和感は、①から⑧までのそれと変わるところがない。かかる表現に対したとき、自分が近代の東京弁に疎いゆえかも知れない、と考えることは、前稿の序説に述べた(p.13上段)。そこで、研究者の所説に耳を傾ける必要がある。

『日本語文法大辞典』(明治書院 2001)の「ない」の項を見ると、連用形には「なく／なかつ／ないで」の三形を立てて、「連用形の「なく」は、動詞に下接する場合、中止法として使われることはほとんどなく」(鈴木英夫執筆)とある。鈴木氏は東京大学の出身で茨城大学の教壇に立った、東京とその近辺の言語にはよく通じた学者である。したがって、この記述によると、我が直感は大きな過ちを犯していないようだ。それが著者の作品に見えるということは、やはり注目していいだろう。

## サ行変格動詞

著者のサ変動詞は、その否定形が「しず」となることを指摘しておきたい。

- ① 本も読まず話もしず、三時間すわっているのは、つらいおしおきだ。(1307-10)  
 ② 貧乏は貧乏らしく御大層な猿まねなどをしずに、(187-9)

③ 母親といふ母親を優しさ一方にしずにはおかない幼顔こえがほであつた。(440-1)

④ あやしみもしずにあたその細長いものは、(485-15)

⑤ はつきり云へばいゝのにやうもしず、(580-8)  
 このほかにも数例拾つてあるが、すべて「しず」である。

国語辞典によると、サ変動詞「しる」は中世以来の文献に見えるが、否定形「しず」の形はごく稀である。著者はこの形で記憶していたのかもしれない。

右のほかに、辞書や文典に記される顕著な事実には、一字漢語がサ変動詞の語幹になって語末音が促音「ッ」に変化すると、サ変ならぬ上一段活用になることがある。「決する」「接する」「喫する」のたぐいである。著者の用語にもそれが散

見される。

- ⑥ 泣きたいのは主人のはうだらうと察すれば、(1328-7)  
 ⑦ やつと今になって察しられる。(11284-10)  
 ⑧ おしはかつて、察しただけでも、(660-2)  
 わたしの目については「察しる」だけで、「察する」に会うことはなかった。

## 格助詞の周辺

初めにわたしの関心を引いた助詞「へ」の用例を並べる。

- ① 学校へ、おつかひへ、往復する私も彼等の口をのがれるものでなく、卑猥なことは投げかけられる。(1216-4)

② (音楽家の叔母が貰つて来た大きなバラの花束が)二ツに分けて一ツはピアノの上へ、一ツは茶の間に置かれた。(133-10)

③ 折畳まれた狭い山襪へ辛うじて僅かの耕地があるだけなので、(11275-5)

④ 蟬の羽のやうな薄ものをみすばらしく濡らして、つめたい高原の秋雨へ別れた。(4296-3)

⑤ 私は本がいつばいあるうちへ生れました。(5367-1)

第五卷までの各巻から一例ずつ挙げた。「へ」の用法云々と言ったら、何を今さら、と思う人が多いに違いない。日本語の母語話者には自明なはずだからである。だが、右の五つの用例は自然な日本語と受け取れるだろうか。

中世末の日本語には、東国・京都・西国で、方向を示す助詞の異なる旨を記した文献のあることが知られている。その内の「さ」は、江戸よりも東の地域が中心であったらしいので、ここでは「へ」と「に」について考えればよいだろう。

まことに大げさなことだが、著者の活躍した時期に近い刊行物、国立国語研究所報告3『現代語の助詞・助動詞——用法と実例——』（秀英出版 1951）以下、『報告3』と略記）から、「へ（格助詞）」の項を引く。それは三分して掲げられている。原著の丸囲み数字を括弧書きに替えて引く。

- (1) 動作・作用の向けられる方向・方角。（目標。）
- (2) 動作・作用の向けられる相手・対象。
- (3) 動作・作用の帰着点。

著者の用例①について考えると、「学校」は(3)の動作・作用の帰着点にあたるが、「おつかひ」は行為の目的なので、ここに助詞「へ」を用いているのは不自然である。

続く②について考える前に、念のために、『報告3』の(3)

に添えられた括弧書きを見よう。次のように書かれている。

「に」に比べて、どちらかと言えば帰着点に到着するまでの経過をより強く示す。

この場面で、ピアノのある部屋と茶の間の位置関係が不明なので、ここに格助詞が使い分けられたのは理解できない。③の「山巖へ……耕地がある」という助詞の使用は、わたしの理解を超えている。

④・⑤のたぐいの表現が、自分の知らぬうちに広がっているのかもしれない。そこで、小内一編『てにをは辞典』（三省堂 2001）を見たが、動詞「別れる」「生まれる」に関わる多くの用例の中に、格助詞「へ」を用いたものはなかった。やはり著者独自の表現なのだろう。

著者には、このように、「に」とあるべき箇所に「へ」を用いる傾向があると言えそうであり、ここに挙げたのは目についた実例のごく一部分に過ぎない。

#### 助詞「も」をめぐって

現代日本語の助詞の中でも、「も」と「は」は扱いの難しい助詞である。その分属からして、係助詞と副助詞とに別れるが、近年は「とりたて助詞」の名称の行われることが多い。

本稿の目的は分属云々ではない。その文法的な意味、他の語との承接のしかたなど、この著者らしさが感じられる数例を、読者の考察に供しようとするものである。

- ① そのどれも多少は触れてゐると思へるが、そのどれも私をうなづかせ満足させるわけには行かない。(121-4)
  - ② そこいらにあるもの何でもは、みな種になる可能性をもつてゐる。(1130-12)
  - ③ つつまでも若くありたいのは、誰でも望みである。といふのは、いつまで若くはなり得ないといふことでもある。(1178-1)
  - ④ 二度目の休み時間に、誰もにさりげなく逃げられてゐる碧郎(736-2)
  - ⑤ 幾重にも重なる山巒(359-8)
- 偶然なのかも知れないが、右の挙例は、「どれも」「何でも」「誰でも」「誰も」「誰でも」「誰も」「幾重も」というように、ともに「不定詞+も」の句に、さらに助詞が接した形である。
- 古典の記述はごく典型的な用例について行われるので、右に示した例などは、そのつど首をひねらされることになる。

#### 準体助詞「の」

初めにいくつかの用例を示して読者の反応を眺めていたい。

- ① さういふ箱をつかつてゐたことは、なにか幸田家の前身が茶坊主であつたのに思ひあはせられる。(1326-6)
  - ② 幕あきの夜明けの照明が今までの舞台より大進歩をしてゐるのだから、よく見て来いと云はれたのはうが深くのこつてゐる。(1158-7)
  - ③ お経のあひだちゆう私はなんにも思つてゐなかつたのに気がつく。(11287-11)
  - ④ 材料揃へにかう時間を食ふののじれつたさ、いら〜する。(11395-15)
  - ⑤ いまさら兄息子の家へはひつてもおちつきはないのがわかつてゐた。(7382-15)
- 同一形式の記述なのに、同一表現にならないこともある。
- ⑥ なぜ人に敬遠されるか、なぜ人を気に入らないか、それからこの何人かの友だちのどこが気に入るのかと考へるのだが、(4304-4)
- 先行する二回の「なぜ……か」には「の」がなく、最後の「ど……のか」にだけ「の」がある。
- 著者の用例をもう一つ掲げる。昭和廿九年十月発行の雑誌

『厚生』に掲載された、デイズニー映画「シンデレラ」を観ての感想である。もし外国人から日本の掃除について尋ねられたら、と考えるくだりである。

⑦ たぶん多くの主婦は、さて日本の掃除はと改まつて訊かれて、い、返辞ができないのだらうと思ひます。

(四299-7)

いずれも、先行する叙述を受けてそれを体言化する、ゆえに準体助詞と呼ばれる「の」による表現である。この機能をする語は、ほかに名詞「こと」もあるが、著者はこの「こと」を用いない。そこで、次のような表現が生まれる。

⑧ かういふ土地へ来て芸者でないしろ、と臭い女でも平気

であるのからが、芸妓への侮蔑であるが、(五95-8)

全集第七巻まででわたしがマークした用例数は、ここに挙げた数の五倍ほどである。これは、何も著者の文章に限ったことではなく、現代日本語ではよく目にする景観である。ここに論じた「の」の諸相については、「悩ましきへの」——言語時評・十九——(『成城文藝』二百五号 2008.9)に書き、拙著『かなしき日本語』(笠間書院 2009)に再録した。

不定語による表現

品詞分類では、代名詞・数詞・副詞に属する、不定の意の語による表現を観察する。

不定語は、助詞「も」と共に用いられると、単独で用いたときと意味が異なるのだが、この両者を区別せずに用いる習慣が古くからある。そのことなどにも触れて、わたしは「概数表現くさぐさ——辞苑閑話・六——」を書き(『成城文藝』二百廿八号 2014)、のち『葎の髓からのぞく日本語』(2020 和泉書院)に再録した。そこに用例を挙げた近代作家の三人は、著者、向田邦子、松本清張であった。

このたぐいは使用の機会が多く、わたしが拾った用例数も七十に近い。余りの多さに辟易したので、拾いもらしても多いだろう。わたしがこれに注目したのは、使用例の半ば近くを誤用と判断したからである。それも含めて一部を例示する。

① 辛抱強く日課のやうに何十軒の借家や売家を見てまはつたが、(一89)

② 何十年も前にしたであらう習練は、さすがであつた。(一116-14)

③ 幾十年筆一本の生活をしてきて、かつて机の前に不覚はなかつたものを、(一238-5)

④ そんなのが幾重ねも一ト隅にまとめてあると、(三

439-3)

⑤ 対手もいつまで弱くはなつてゐられないといふ意地を持たされる。(五271-6)

⑥ 桜の幹もいくぶんてりを持ちはじめたかなといふ気候がある。(五285-5)

⑦ この何日間、自分は犬と同じになつていたと会得した。(六399-8)

私見では、助詞「も」の下接した②と④以外は誤用である。

#### 原因と理由の接続助詞

接続助詞のうち、著者が「ので」と「から」をいかに使いわけているかを見よう。

① 借金取りと云はれてはいさ、か気持がよくないから、これらの話は一ツだけしか残つてゐない。(一131-7)

② は、も「うまい見立だ、ハイカラだ」と褒めたから、ます／＼楽しかつた。(一149-2)

③ 八畳からは口授の声が断続して聞えてゐた。低いから心をとめて聴いてゐれば何を云つてるのかもわかるが、

(一1385-14)

④ 染香はけふお座敷がか、らないからあちこちのお茶屋

の女中衆へ、もしふりの口があつたらとちかに頼みこんでゐたので、稼ぎ口を待つてゐる。(五100-11~12)

⑤ (屠場見学の感想) 屠の興奮はかけらばかりもないから不思議だつた。(六27-11)

⑥ 河に沿つた土地だから、春秋二季にはボートレースがあつて、(七128-6)

改めて言うにも及ばないことだが、上引『報告3』にいうように、「ので」は「表現者の措定によらなくても明らかかな事実であるような事態」を、「から」は「表現者が、前件を後件の原因・理由として措定して結びつける言い方」である。著者は「ので」を用いることはほとんどなく、「から」専用に近い。これはわたしにとって一つの謎である。一文中にこの両語が見える④は珍しいものである。松村明『日本語の展開』(中央公論社「日本語の世界2」1986)に、夏目漱石の作品も同じような状況だということが指摘されている。時と所が関わっているのだろうか。

#### 語彙をめぐる

造語・一



著者の造語癖が父親譲りであろうとは、前稿にも書いた(p.155 上段)。ここではその実例の若干を挙げておく。これは、幸田文学作品言語景観の典型とも言えるだろう。説明も文脈も要しないものは、簡潔に処理する。その傾向は、著者が著述を始めた時期の作品を収める第一巻に著しいので、以下の十例には巻の表示も省く。

- ① くら〜しゅ (6-14)
- ② 慰めよう心 (15-7)
- ③ 早くよくなつてもらひた<sup>ち</sup> (28-12)
- ④ 蛙のしやつ面水かけた的 (76-11)
- ⑤ 教へてやらう心 (124-15)
- ⑥ 師走を忘れ顔 (334-5)
- ⑦ もやしみつば育ち (351-6)
- ⑧ 寸厘たりと (352-9)
- ⑨ 追憶書き屋 (381-3)
- ⑩ トラカシューム (381-5)

③乃至⑥のように、句や文相当の語連続を(臨時一語)にしたてることが多い。

その造語の思想を一語で表現すると、「簡潔化」と言えるだろう。例えば、右の⑥を普通に表現したら、「師走を忘れ

たような顔」とでもなるか。四拍の増加に過ぎないが、いかにも間延びした表現である。それを一気に一語に縮約してしまうのである。

以下、第二巻以降について続ける。

- ⑪ 人斬り村正的なことば (136-12)
- ⑫ 早くしあげてしまひたさ (1196-4)
- ⑬ ゆず子への気に入らなさ (11107-3)
- ⑭ おもへば長い著、たさに呆れもするが、(四171-13)
- ⑮ 一応は知つてるつもり何もしらなさ (四237-2)
- ⑯ 一日怠るとあら、捜しをされる割に合はなさ (七330-15)

⑰ パン屋の事務所は大陽気で、いまや誰もみんな総うかれだつた。(六328-1)

右のように、著者は、先行する語句をまとめて「〜<sup>ち</sup>」に収める表現を好むこと著しい。

#### 造語・二

著者の造語法のもう一つの特徴は、語構成論に言う「逆成法」である。

その一例が動詞「絞れる」で、聾啞の少女を叙したくだけり

に見える。

① からだの外へ絞れ出る声といへば、ウウと云ふだけ。

(1352-10)

出水のあとの描写にも見える。

② 地下水ちすいといふものはへたに掻い出したりしようものなら、

かへつて余計に絞しぼれて溜るものなのだ。(二文省略)

少しづつ、絶えずさして来る絞れ水をか、へてゐる気で、

(4342-5)

第七巻では、道についての叙述にそれが見える。

③ こちら側の方々の道から絞れて来るかなりの人数を渡

して込んでゐる。(758)

④ 町へと集まつて来る道だから、橋の手前で一ツに絞れ

てゐるのである。その絞れた処に交番があつた。(七

121-9)

なお、わたしの手元のどの辞書にも、「絞れる」「絞れ水」は

載っていない。

全集には「引つ張る」の用例がいくつも見える。初めに

「お久伯母」を叙するくだり。

⑤ 瘦せた骨の上に皮がゆとりなく引つ張れててかゝし、

(118-3)

下一段活用らしいので、「引つ張る」に対応する受動詞としての造語であろう。

⑥ 腫れた部分の皮膚がひつばれて、焼けどのやうにてら

くしてゐた。(1187-10)

これは継母のリョーマチの症状の記述で、小説「流れる」に

も左記の用例がある。

⑦ 芋蔓式にひつばれてきた頃はしさ(5245)

かかる造語はやはり不安定らしい。牛乳屋が拾つた野犬を

めぐる次の文章がある。

⑧ 鎖がびんと張れて、引きずられ引きずられげんはそれ

を伸ばした。引つ張られて立ち寄れず(6309-3)

ここに、新造の受動詞と、他動詞による本来の受動詞、二つ

の表現が出現したのである。著者の歯切れのよい文体を生む

要件の一つだと言えるだろう。

次の「押し売る」「結ばる」の用例もその線で解釈できる。

⑨ あちらは押売らうとし、こちらは押売られまいとする

(三十五字省略)。ことに押売れずに帰る者は時間的に

損失をしたわけだから、(4338-14-15)

⑩ 滝沢さんの孤愁には衝たれはしたけれど結ばらず、

(1165-10)

①二人の心が何かの色彩を帯びて結ばつたと云ふ甘<sup>あま</sup>いことでは決してない(四229-5)

新造語に対する言語史上の評価は、第一に〈俗語〉である。したがって、著者の文体・表現の〈歯切れの良さ〉〈簡潔さ〉は、かなり多くの面で俗語の上に成り立っているのだ、とわたしは考える。

### 類義語

まず発語行為の動詞に絞って、著者の作品の言語景観を描きたい。

昼近く四人の来客があつて、昼食をどうするか著者が思案するくだりである。

①あまり盛んに切り目もなくしゃべつてゐるし、(四251-5)

修飾語「さりめなく」から、来客の活発な談話の様子が推察でき、これこそ「しゃべる」としか表現できない行為といふべきだろう。

次は結婚について書いたエッセイで、離婚経験を持つ著者が娘に勇気を与える話をしてやれないという部分である。

②それは聴くはうもしやべるはうもいやなことである。

(四239-8)

次は借金の無心を拒絶する心得について書いた箇所である。

③こちらは説教をしてゐるつもりでも、しゃべつてゐるあひだに腹を読まれてしまふ。(四337-4)

引用は省くが、全集第六巻に、初めて放送に出た時の経験を書いた短い文章「放送雑談」がある。スタジオ録音らしい自身の発語行為が、五回とも「しゃべる」と書かれている。公共放送において、準備して発する談話は「しゃべる」と表現すべきものだろうか。

かくして、②以下、著者の「しゃべる」の用法は、わたしの用法とも、国語辞書の記述とも大きく異なるものである。

このような感想は他の動詞からも受けることがある。

様態を表わす接辞はいろいろある。その中で、「っぽい」は、いま大氾濫と言える使用状況にある語である、著者の用語にもこれが多く見られる。

昭和廿九年発表の小説「黒い裾」、千代が母親の名代で伯父の葬式に参じ、読経の始まつた時のくだりに次のようにある。

④おそらくいちばん感じっぽいはずなのに、千代は眼を濡らさずに伏せてゐた。(三408-15)

若い女性らしい繊細な感性をとらえた表現だと思う。それなら、「感じやすい」とでも表現すべきではなからうか。

「つばい」は、語頭が促音で実現するという、日本語としては全く特異な形態の接辞である。その形態の実現形を探すと、白・青・黒などの色彩語を語基とするもの以外は、「飽き、おこり、きざ、ぐち、湿め、埃り、惚れ、水、安、理屈、忘れ」など、何ほどか負の価値をもつ語が多い。中立的、または正の価値を負って用いられることは極めて少ない。「こどもらしい」と「こどもつばい」では、評価が正反対である。著者の用例には、「疑ひ、おこり、軽、感じ、愚痴、恋、腹立ち、紫」などの「つばい」が見える。少数の「大人つくささ」に対して、多数の「おとなつばい」も見られる。それにしても、この多さは尋常ではない。

### 音象徴語

いわゆる擬声語・擬態語、オノマトペである。著者がこのたぐいの語を好んで用いたこと、特異な形態の語の多いこともよく知られている。前稿に、水藤新子<sup>すいとうしんこ</sup>氏の論文から借りて書いたように、初期作品に用いられたその異なり語数は七百三十五だという。調査範囲を、わたしの言う「前期」に広げ

たら、それは一千に近いだろう。だが、その語性は初期と大きく異なりはすまい。水藤氏には、その論稿の続篇が多くあるので、屋上に屋を架することはせず、全集第七巻に絞って、「そぼ」と類音「しよぼ」を語基とする語類を拾って示すにとどめる。

① 碧郎は促されてそぼそぼつと中へはひつてしまった。(39-12)

② 得々としてめた気もちはしよぼんと縮まった。(2149)

③ (碧郎の臨終が告げられて) こんな、そぼんとした、これが臨終だらうか。(2649)

④ 私は私の食卓を持つてゐるわけだが、われながらそぼんとしたものである。(289-12)

⑤ どんなに酔つてゐてもその門を見ると、そぼんとして彼は正気づく。(371-14)

⑥ 鉢のなかも皿の上も散らけてあるなかに、ひとりそぼんとすわつて手盛り飯を黙々と掻きこむのは、(392-10)

著者の文章の魅力について、水藤氏は、前引論文の冒頭で、その文章の一部を引き、造語的語句、既成のオノマトペを変形させた語、破格の文の併用は、「悪文」のはずなのに、それは感じさせない、と評している。全く同感である。

## 表記をめぐる

著者の表記の特徴は、一見して明らかのように、歴史的仮名遣い、平仮名の多用、傍点の多用、この三つだと言える。

四十歳を過ぎでから文筆生活に入った著者には、特に若い読者を想定した文章以外は、使い慣れた歴史的仮名遣いが自然に選ばれたのだろう。この三つのうち、傍点を打つのは誤読の回避や読みやすさへの配慮による方策なので、平仮名の多用と一体だと言える。著者はまた、下町の日常生活に題材を得ることが多く、それは漢字よりも仮名との親和性が高いので、仮名表記が多いのも道理である。かかる文章について、表記の点で指摘できる特徴をいくつか記しておく。

### 捨て仮名

著者は数詞の表記には仮名を用いない。そして、助数詞がつくときは「二ツ栗の一ツに」(159:10)のように、漢字に片仮名の助数詞を添えた。助数詞なしにじかに複合するとき、「一ト刷毛、二タ刷毛」(159)のように、和数詞の語基の後半を捨て仮名にして、片仮名を小書きする。第一

巻から例示すると、「一ト睡り」(85:6)、「一ト口」(90:9)、「一ト畠」(173:9)の如くである。廿数個の用例中に、例外かと思えるのは、「一碗の茶」(217:10)だけであるが、「イチワン」と読むなら、話は別である。

他の巻には、その原則を逸脱しているかに見える「一ツ時」(141:9)と「一ツとき」(425:8)、「八ッ当り」(702:4)がある。校正もれなのかも知れない。

### 振り仮名——家

平仮名を多用する著者は、国語政策による漢字制限や訓の制約などに、あまり配慮しないように見える。原稿は編集者の手を経てのち活字になるので、それで不都合はなかったのだろう。そんなことを考えさせるのが、漢字「家」の用いかたである。第三巻の随筆集『草の花』から「なつやすみ」と、それに続く「きぬた」の数ページに絞って考える。

初めは、小学生時分に訪れた、近隣の大きな園の思い出の記述である。この「園」は「エン」と読むのだろうか。

①あづま家やがあり、飛石いしがあり、(80:1)

続く二つは女学校の級友の家についての叙述である。

②女学校友だちの「家」といふものは、なんとなく遠慮

を起させるものがあつた。(814)

③手輕に門から声をかけて呼びだすわけには行かない「家」であり、改めて挨拶もいる「おかあさま」であつてみれば、(818)

そして終末部、女学校から帰宅する途中、大川を上下する船を見ての感慨である。

④そんなかすかな燈ではあつても、あかりは家につながつてともつてゐた。わがま、な父、負けてゐないは、短気でおこりつぽい弟、決して平和とはいへない家で、はあつても、夜の川波に揺れるランプには、恋しい家、あた、かい家が映つてゐた。(116-13)

ここには、引用符と振り仮名付きの漢字「家」と、引用符のないそれとに書き分けられており、家に対する著者の執着が凝縮しているようである。

一方、「家」のいま一つの用例が、同じ第三巻の「ほん」と題するエッセイに見える。空襲に備えて父の蔵書を疎開したときの感慨である。

⑤私ははじめて本のないこの家の家の相といふものを知らされた。(441-3)

古来、この国では、「や」と「いえ」はかなり厳密に使い

分けられていた。漢字の訓の歴史を一瞥するだけで、そのことがほぼ察せられる。いま、料亭の屋号などの「何某家」、「山の中の一軒家」などに見る「家」は、飽くまでも俗用である。著者にも「借家や売家」(108)がある。振り仮名はないが、「しゃくや」と「うりいえ」であろうか。

漢字「家」に「や」の訓を与える辞書は、『言海』あたりが早いものらしい。住居を意味する「うち」、そこに暮らす家族や家庭も指す「うち」を表記する漢字を、この国はまだ用意していない。かかる日本語の現実を映して出現したのが、「家」をめぐる著者のこの表記なのだ、とわたしは考える。

#### 漢字と仮名・一——ニオイ

著者の作品を表記の視点から見ようとするのは、それによつて語の理解のしかたが知られると考えるからである。

まず「におい」。露伴が臨終に向かうようすを書いた箇所、全集第一巻の「父(菅野の記)」の五行ほどを引き、関連語も太字に表記する。

①血なまぐさいといふけれど、血はたしかに臭い。いやな臭ひだ。鈍重な、づう／＼しい、押し太いほひだ。

ものを統一させる、清澄なほひではない。悩乱させ

騒動させる臭ひだ。父の吐いてゐるあひだ、私は夢中であり、ほつと後始末の段になると私の血はこぼしの臭ひに誘はれて、すつとからだのどこかへ固まるらしかった。(123-15～24-4)

ここでは、漢字「臭」が、形容詞「くさい」と名詞「におい」、「二つの語にあてられている。また、仮名書きの「にほひ」と、漢字仮名表記の「臭ひ」が、ともに「におい」の音列を担っている。字面を追っていてもややこしいのに、朗読されたら理解は難しいだろう。かかる景観は他の巻々にも出現する。

次に第四巻の「私の日記」。『知性』の昭和廿九年九月号に、現代仮名づかいで掲載された廿六行の短章である。その中ほどの四行を引く。

②通りすがりに洋傘の中へ、物の臭いがたゞよってくる。  
塩鮭、干鰯、昆布からは生ぐさい塩の臭、菓子類からは酔っぱい砂糖のにおい。塩のもどっている臭、砂糖のかえっている臭いだ。腐敗ではないが新鮮健全な匂いではない。嗅ぎたい匂いじゃないが、特別急ぎ足で逃げる程でもない。張りのないにおいのくせに存在を明らかに示しているにおいだ。(四190)

送り仮名のない「臭」は「しゅう」とでも読めというのか、わたしには遂にわからない。

第五巻の小説『流れる』に、「にほひ」を二種の漢字で書き分けた箇所③があるが、④ではその表記の意図が読めない。そして⑤である。

③ 廉くない線香の匂ひと花たての腐つた水とが臭ひ、  
(36-4)

④ 牛肉は野菜とまじつて、うまさうな臭ひをあげて煮える。(77-5)

⑤ こんなにからだぢゆう臭く臭つてゐるのは病気が悪い証拠だ。(79-8)

漢字と仮名・二——けはひ

仮名遣いと読み方のずれがいかにかに処理されているか、それを知る上で恰好の語が「けはひ」である。この語の使用が目だつのは、病臥した父を看病する記述中である。その七月十三日条に、「父は出血しても私を呼ばなかつたから、僅かのけはひに気がゆるせなかつた。」(116-12)とあるのをはじめ、おおむね「けはひ」と書かれている。わたしの関心は、著者がこれをいかに音声化していたか、である。拾った用例

数は、「けはひ」が廿一、「気配」が二つ、「けはい」が四つである。

まず得られたのが、「鳥二題」と題する文章中、飼っている片目の鷹についての記述である。「けはいで知るか嗅覚か、あるいは片目でも不自由しないものか」とある箇所(二〇〇頁)である。昭和廿四年七月卅日の東京新聞朝刊に掲載されたので、おそらく編集部の手で現代仮名づかいに整えられたのだろう。著者の表記は「けはひ」だったのではなからうか。

漢字表記の二つの内の一は「父(葬送の記)」の「殊に死といふことが境さかしては、一層手厳しい気配が思はれる。」(一〇一)に見える。いまひとつは、昭和廿九年九月発行の『知性』に載った「私の日記」の一節で、「何だか白いものがうしろをよぎった気配がした。」(四二〇頁)で、これには「けはい」の振り仮名がある。

結局、断定はできないが、著者は「けはひ」の仮名書きを基本としながら、近代に広まった漢字表記の「気配」とも、仮名表記の「けはい」とも書いたようだ。もし、その「けはひ」をケハイと読んでいたとしたら、新旧二種の仮名遣いが混じった表記だということになる。わたしは、ケワイという

発音を伝えていほしかったのだが。

## 結 語

本稿に着手するとき、稿者の頭にあつたのは、原子朗氏の『宮沢賢治語彙辞典』のような内容のものであつた。その作家の用語をまとめる以上は、その文学世界なり思想なりの全体を把握できるようにするのが当然であり、ひとつの語や表現が、その著者のいかなる作品のいかなる文脈で用いられているかを記述すべきだ、と考えたからである。だが、それを着想した時、わたしは八十路に足を踏みいれていて、遅すぎると思った。そこで、せめてその一部分でもと考えてまとめたのである。

幸田文全集を通読してその作品世界全体を眺めわたしたすえ、その文筆生活を三期に分け、先ず、その前期の語彙を集成したのが前稿であるが、予想以上の分量になってしまった。しかも、『成城国文学』には、かかる内容の原稿に関する投稿規定がなかった。そこで、拒まれることを覚悟して投じたところ、幸いにも、編集委員会の好意で一括掲載が認められ、八十ページを割いて掲載されたのである。



イタリア国籍の著名な日本語研究者であるドメニコ・ラガナ氏は、研究生活の初期に『流れる』に挑んだときの当惑ぶりについて書いている（『新編ラガナの文章修行』創拓社1989）。その作品の冒頭「このうちに相違ないが、どこからはひつてい、か、勝手口がなかった。」が分からなかったという。それぞれの単語の意味はわかっても、全体の意味はどうしてもつかめなかったのである。日本人にはその省略の醸し出す味わいが好まれるのだと思う。

序説には、著者の文章に初めて出会った「紙」の思い出を書き、その文章に最初に言及した亀井孝氏の賛辞を紹介した。いま稿を閉じるにあたって、心に強く響いた文章のいくつかを掲げたいと思ったが、その数が余りにも多く、「偏愛する幸田文アンソロジー」でも編まなくては収まりそうにない。そこで、『父（葬送の記）』から一つだけ、「白」の末尾部分を引いて、本稿を閉じることにする。

今こゝに父を送る野道は細く、人には愛がある。私は湧きかへる感情を畳んで頸を立て、歩き、喪服はさや／＼と鳴つた。つゆ草が一トむら。名にちなむ花よ。

(一94)

【完】

#### 前稿の訂正

一 52ページ下段六行めの「昭和五十二年」を「昭和三十三年」に訂正します。これは、西村準吉氏のご指摘によるものです。

二 154ページ下段の末尾から、次ページにかけて、「幸田家の父と娘のくらしの記録から見えてくるのが、新造語の創造、造語癖である。露伴の「あとみよそわか」はその代表であろう。」と書きました。それについて、讀賣新聞のコラム「編集手帳」(2004.9.22)が、江戸時代の草双紙に「後看世蘇和歌」と見えて、露伴の造語ではないらしい、と書いていることを、受講者の角丸卓也君が教えてくれました。これは、『日本国語大辞典』第二版(2000)に出ていることでもあります。

以上、二点の訂正を報告し、両氏への謝辞とします。

(2022.9.30 成稿)

(くどう・りきお 成城大学名誉教授)